ジューイッシュ・ハーレムの痕跡　－シナゴーグから黒人教会へ－

Vestiges of Harlem's Jewish Heritage : From Synagogue to Black Church

鈴木　元子
文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ハーレムは黒人の街として世界的に知られているが、現在のハーレムが形成されてくるまでには幾つかの段階があった。アメリカ・インディアンの時代、オランダ農民たちの時代、富豪たちの高級住宅地、移民たちの時代、そして黒人スラム街の時代である。これらの変遷の中で、特に19世紀末から1920年までの一時期ユダヤ人地区であったというが本当であろうか。現在、黒人教会として使われている建物も、もともとはシナゴーグであったことを、何らかの残存する痕跡を探ることで、ユダヤの文化的遺産であることを確認する。

Harlem is well known as an attractive town for African Americans, but there were many ups and downs that molded Harlem into what it is today. The Harlemites have been shifted from Native Americans, to Dutch Homesteaders, the rich living in prestigious mansions, various immigrants, and to today's black inhabitants. In this Harlem-history is it true that it was once the Jewish quarter from the end of 19th century to 1920's? The buildings being used as Black Christian churches recently were originally Jewish synagogues. Visiting Harlem to seek for vestiges, I could explore Harlem's Jewish Heritage.

はじめに

ニューヨークは「ジューヨーク」と言われるほど、ユダヤ系アメリカ人の多いことで知られている。実際、1968年のニューヨーク市在住のユダヤ人は183万6千人であった。そのユダヤ人が、今では黒人の街として有名な「ハーレム」（Harlem）に住んでいたことはほとんど知られていない。

ニューヨーク市マンハッタン、セントラルパークの北側に広がるハーレムは、アフリカ系アメリカ人居住区として世界的に知られている。ハーレムの行政上の区分については南北が90丁目（ストリートを丁目と訳すことにする）[1]から178丁目まで、東西はハーレム川からハドソン川までとされている[2]。しかし、昔はセントラルパークの中央の86丁目から、その後はセントラルパーク北端の110丁目から155丁目くらいをハーレムと呼んできた時もあり、厳密には定まっていない。一般的にはアポロ劇場のある125丁目を中心とするセントラルパークの北側一帯を指している。今日のハーレムは、黒人の多い「セントラル・ハーレム」と、レキシントン・アベニュー以東でプエルトリコ系（加えてハイチ、メキシコ、ドミニカ共和国、アフリカ、ベネズエラなど）のスペイン語を話す者が多い「スパニッシュ・ハーレム」（イースト・ハーレム）と、アムステルダム・アベニュー以西でドミニカ共和国出身者の多い「ウエスト・ハーレム」の大きく3つに分かれている。

ハーレムは1920年代からハーレム・ルネッサンスが興り、黒人文化のメッカと言われて久しいが、その歴史を紐解いてみると、あるわずかな一時期ではあるが、ユダヤ系アメリカ人が居住していた時があった。およそ19世紀末から1920年くらいの時期である。メルティング・ポットやサラダ・ボール、あるいはモザイク文化都市とも表される多文化都市ニューヨークでは、人種が混住しないことがその大きな特徴とされている。拙論では、その一例として、ユダヤ人コミュニティのシンボル的存在である「シナゴーグ」（ユダヤ教礼拝堂）が会衆の転居に伴い、現在では黒人教会として使用されていることを、筆者がハーレムで撮影してきた写真を付しながら、論述していきたい。

1．ハーレムの形成

（1）アメリカ・インディアンの時代

マンハッタン島にはネイティブ・アメリカン（先住民）が住んでいたが、1626年にオランダ人が彼らからこの土地を物々交換で手に入れてしまった。マンハッタンの語源はこのときバッテリーパーク（Battery Park）[3]で取引をしたインディアンの部族名マナハッタに由来する。ただし、ハーレム辺りに住んでいたインディアンは、この取引の当事者ではなかった。ハーレムに最初に住んでいたウェककアスギーク族（Weckquasgeek）は、イロクォイ部族連合（Iroquois nation）に属していた。ハーレムのインディアンは「レケワの人たち」（Reckewa's People）としても知られていた。

1492年のコロンブスによる西インド諸島発見は、ヨーロッパと南北アメリカ大陸間にわずかながらも交流の道を開いた。加藤恭子著『最初のアメリカ人』[4]によると、フランス、スペイン、イギリス、イタリア、ポルトガルの探検家たちが新大陸のあちこちに足跡を残しているし、フランスはカナダのインディアンたちと毛皮貿易を始めていた。メイフラワー号に乗って新大陸に着いたピルグリム・ファーザーたち（Pilgrim Fathers）が冬を越せたのも、現メイン州の沿岸から歩いてやってきた一人の男、サモセット（Samoset）という名前のインディアンが生活に必要なことを一から教えてくれたからである。その沿岸には漁業と毛皮買いつけのためにイギリス船がときどきやってきていたために、サモセットは英語を多少は知っていたのである。当時、プリマスにいたパタケット・インディアンは、数年前に流行った疫病のために死に絶えていた。また、コッド岬のインディアンはワンパノアグ（Wam-

panoag）・インディアンで、各地域にそれぞれ種族の異なるインディアンたちが暮らしていた。近隣に住む諸種族の大酋長がマサソイト（Massasoit）で、ニューイングランド植民地の開拓民とインディアンとの関係は1636年まで平和なものだったが、息子メタカム（英名フィリップ）の時代になると、「フィリップ王の戦争」（1675－76）が起き、フィリップ王の指揮のもとワンパノアグ族の決起にニューイングランド中のインディアン諸部族も加わって植民地連合軍と戦った。恩人であったはずのネイティブ・アメリカンだが、これ以後、白人勢力に追い散らされていくことになる。

（2）オランダ農民の時代

ハーレムにおけるオランダ農民時代に入る前に、なぜオランダなのか、という素朴な疑問が生じるだろう。そこで、まずオランダと当地の関係について触れておこう。

オランダではカトリックからの弾圧を受けながらも、1561年に基礎を確立したオランダ改革派（Dutch Reformed Church）は成長を続けていた。1574年、オランダがスペインと戦っていた頃のことである。スペイン軍が地元のナールデン（Naarden）やハールレム（Haarlem）などで残虐行為を働いたのち、ライデン市（Reiden）を占拠すると、ライデン市民たちは城塞に数ヶ月間たてこもりながら、ついにはスペイン軍を追い払った。その褒賞の意味を込めて、1575年にオランダ建国の父と言われたオレンジ公ウィレムⅠ世が、とりわけ改革派神学のためにライデン大学を設立した。オランダで最初の大学であった。のちにこのライデン大学から、J・アルミニウス（Jacobus Arminius, 1560－1609）という神学者も出て、オランダの正統派カルヴァン主義のみならず、新大陸アメリカでも影響を及ぼすようになる。ジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1703－58）のニューイングランド神学の中にも、アルミニウスの神学思想は息づいている。

そのオランダが新大陸植民を開始する発端となった事件は、オランダ東インド会社の依頼でイギリス人探検家のヘンリー・ハドソン（Henry Hudson, 1550頃－1611）がニューヨーク湾まで到達すると、1609年に大きな川を発見し、その川を北上したことに遡る。のちにその川は、彼の名前にちなんで、「ハドソン・リバー」と名づけられた。1621年にオランダ西インド会社（the Dutch West India Company）を設立して、デラウェア地方（Delaware）に約30名のオランダ移民を送ったのがオランダ植民の始まりであった。

1626年、西インド会社のディレクター・ジェネラルのピーター・ミネウィット（Peter Minnewit）は新大陸に渡ると、60ギルダー（24ドル）相当の品物と引き換えにマナハッタ・インディアンからマンハッタン島を獲得してしまったのは、今にして思えばただで宝島を手に入れたようなものであった。

曽根暁彦著『アメリカ教会史』[5]によると、1623年に富裕なオランダ系ルター派の最初のグループが渡来するが、牧師もおらず、教会を形成するまでには至らなかった。1628年に初めてオランダ改革派の牧師D・J・ミハエリウス（Domine Jonas Michaelius）がマンハッタンに到着すると、ニューアムステルダムにオランダ改革派教会を組織した。ニューアムステルダムが港町として発展するにつれ、コスモポリタン的な性格を帯びるようになり、宗教においても各教派が雑居するようになった。ところが、1647年にオランダ植民地総督に就任したP・ストゥイヴァサーント（Petrus Stuyvesant）の暴虐な圧政により、インディアンたちは迫害され、移民たちの自由も奪われていった。1654年からはマンハッタン島を中心に、ルター派をはじめ非国教徒に弾圧を加え、特にクエーカー派には厳しい弾圧がなされた。スペイン・ポルトガル系のユダヤ人が初めてマンハッタン島に来たのは、ちょうどその1654年頃のことである。

時代的に前後してしまうが、もう少しつけ加えると、新大陸におけるオランダ植民と並行して、イギリスによるニューイングランド植民が在った。むしろこちらの方が有名である。実は、そのピルグリム・ファーザーズとオランダ、すなわちライデンとは関係があったのである。イギリス本国では1603年にジェームズ1世が即位すると、ピューリタンに対する迫害が一層厳しくなった。ロンドン北方のスクルービー（Scrooby）という小さな村のピューリタンたちは、ジョン・ロビンソン（John Robinson）に率いられて1608年にオランダに渡って大学の町ライデンに入ると、1620年に新大陸に移住するまで、ライデンに定住した。ロビンソン指導の教会は、200名ほどの大きな教会に成長した。1620年にライデンをあとにしてサザンプトンから出航したが、そのメイフラワー号の乗船者102名の中には、ライデンの教会員が35名もいた[6]。

その後、イギリスやオランダのピューリタンたちが続々と移住してきた。イギリス人が北部のボストンを中心に植民していったのに対して、オランダ人たちはマンハッタン島を目指した。1626年に、オランダ西インド会社がニューネザーランド植民地（マンハッタン島南端）を設立したのは前述した通りである。こうして、イギリスとオランダが権益を競うようになると、オランダの植民地は南のバージニアと北のニューイングランドに挟まれて苦戦するようになる。総督は、ニューアムステルダムの北側に城壁（Wall、ウォール）を築いて、安価な住宅を建てると入植者を送り防御を固めた。このときの木の城壁が、現在金融街として名高い「ウォール・ストリート」の起源である。

（ウォール・ストリートの標識）

ハーレムには、1637年に最初のオランダ植民者が入った、と言われている。オランダ人たちは故国オランダのライデンから数十km北にある小さな町「ハーレム」（またはハールレムと読む）（Haarlem）にちなんでここを「ニューハーレム」と名づけた。ヨーロッパ人たちはここで銃やウイスキー、その他安物品と、ネイティブ・アメリカンのキツネやミンク、クロテンの毛皮、アーミン（エゾイタチ）の白い毛皮、ビーバーの皮とを交換していた。

フレデリック・フィリップス（Frederick Philipse）とその息子アドルフ（Adolph）が、1640年代にはウェクアスギーク族とシント・シンクス（Sint Sinks）から土地を入手し、奴隷貿易およびラム酒や小麦の貿易で大もうけをした。（奴隷制はニューヨークでは1830年まで違法ではなかった。）

1658年、オランダ人によって開拓が本格的に開始され、村が建設された。当時のハーレムは、125丁目からブロンクス（the Bronx）とハーレムを分けるハーレム・リバー沿いの場所で、ここで農業を営んだ。それからのち200年間は農地のままで、手がつけられることはなかった。（1731年にニューヨーク市に合併された。）

マンハッタン島の北にある「ダイクマン・ハウス」（114881 Broadway）は、マンハッタンに現存する最古のオランダ植民時代の農家である。今はミュージアムとして当時の調度品が飾られている。

（3）富豪の高級住宅地の時代（1800年代初頭から1880年頃）

1800年代初頭、アレクサンダー・ハミルトン（Alexander Hamilton）のようなニューヨークの歴史に残る大富豪たちが大邸宅を構える高級住宅地にまで発展した。ハミルトン・ハイツ（Hamilton Heights）は125丁目から155丁目の西側に位置し、「シュガーヒル」とも呼ばれ、高級住宅地として知られた。広い土地を求め、アスター（Astor）家のようなお金持ちが屋敷を建てたので、現在でもその名残りである凝った外壁の立派な建造物があちこちに残存している。

（4）ユダヤ系、イタリア系、アイルランド系移民の時代（1880年頃から1920年頃まで）

1820年頃、市街地はロウアー・マンハッタンであったが、すでに奴隷として働かせていた黒人をはじめ、アイルランド人、ドイツ人、フランス人など、多様な民族がニューヨークで暮らし始めていた。

ニューヨークは港町として発展してきたが、さらに、運河開通後、1832年の馬車鉄道、1868年の高架鉄道の開業など陸上交通の革新によって、急速に発展した。ハーレム自体に大きな変化が訪れたのは、1837年にダウンタウンのロウアー・マンハッタンまで通じる列車が開通したことに起因する。1880年の高架鉄道の完成からは、人口密度が異常に高くなったダウンタウンの住民がハーレムに移ってくるようになった。

19世紀の終わり頃から、ハーレムは富豪の大邸宅が建ち並ぶ地域から、商人の家族たちが住むためのブラウンストーン（赤褐色砂岩）で建てられた2階建てのタウンハウスが密集した、イタリア系、アイルランド系、そしてユダヤ系移民の集まる街に変貌していった。

須田昌弥氏は「『ニューヨーク』を見る視点」[7]で、各エスニック集団が、どのようにしてマンハッタン島内を移動し、1920年頃、各民族が民族ごとにどのように集住していたかを示す地図を載せている。ハーレムには少し黒人も住み始めていたが、むしろセントラル・ハーレム付近に大勢住んでいたのは、ユダヤ人（ロシア・ポーランド系）であった。

『ハーレムの形成』の書物の中で、ギルバート・オソフスキーは、「1900年代に、ロウアー・イーストサイドからハーレムへ引っ越したユダヤ人の少年は、そこで出会った金持ちのドイツ系ユダヤ人に目を見張る。いわゆる『アップタウン・ジュウ』は、同じユダヤ系の移民でもまったく階級が違っていた。かれらは黒い上等なコートを身にまとい、山高帽をかぶりステッキを手にして歩いていた。……ハーレムのいたるところに市裁判所や連邦裁判所の判事の家、市長や政治家、有力な実業家、州政府の政治家の住居」[8]があったと記している。

また、イースト・リバー沿いにはイタリア系住民が住み、アイルランド系はセントラル・パークの東横の90～95丁目辺りに暮らしていた。

（5）黒人地区ハーレム（1920年以降）

20世紀前半にハーレムが黒人化していったのは、政治や経済の要因からであった。荒このみ氏の言葉を借りれば、1911年に、もっとも裕福な黒人教会であったセント・フィリップ・プロテスタント・エピスコパル教会が、ハーレム地区のアパート群を買収すると、NAACP（全米有色人種向上協会）やYMCAなどもミッドタウンからハーレムへ移動し、それまでマンハッタンの20丁目から60丁目のウエストサイドに住んでいたアフリカン・アメリカンたちが、教会とともにハーレムへ移動したのである。また、人種差別法や、リンチの恐怖に絶望したアフリカン・アメリカンが、経済的な活路と精神的な自由を求めて、シカゴ、デトロイト、ピッツバーグ、ニューヨークなどの北部の都市へ移住した。黒人の移民元年と言われる1916年からその後5年間で約50万人の南部のアフリカン・アメリカンが北部へ移住した。これは30年代まで続き、こうしてハーレムは「黒人の町」に変貌していった。それは、地下鉄建設を当て込んで急騰した地価が、工事の遅れにより暴落し、その建物に大勢の黒人たちが住むようになったからである。

2．ニューヨークにおけるユダヤ人の移動

ニューヨークという都市とユダヤ人との関係については、アメリカの植民地時代にまで遡らなければならない。

コロンブスが新大陸を発見した1492年は、ユダヤ人離散の歴史において重大な転換点になった。その頃、スペインやスペインの植民地にいたユダヤ人はカトリックに改宗しなければ追放されるしかなかった。さらには、1497年に、今度はポルトガルからもユダヤ人は追放されてしまった。追放されて世界各地に離散したスファラディー系ユダヤ人が落ち着いた最大の共同体はオランダのアムステルダムで、オランダの世界進出に伴い、中南米のオランダ領植民地に定住する羽目になった。1630年にはオランダ領となったブラジルの特に北部にユダヤ人は移住した。

ところが、1654年にポルトガルがブラジルを再占領したので、そこのユダヤ人たちは、オランダ領であった新大陸のニューアムステルダムに向かうことになった。スペイン・ポルトガル系のユダヤ人（スファラディー系とアシュケナジー系ユダヤ人）23人が、フランスの私掠船セント・キャサリン号で、ブラジルのレシフェ（Recife）を1654年の早いうちに出航したが、マンハッタン島に到着したのは9月初旬であった。

ストゥイヴァサーント総督は彼らユダヤ系の定住を当初認めず、国外移送を考えたようであるが、西インド会社の仲裁で居住の権利を与えた。こうして、ここに北米最初のユダヤ人コミュニティが建設されたのである。最初はシナゴーグ（ユダヤ教礼拝所）を建てることも許されず、総督から幾多の制限を設けられたが、1657年にはニューアムステルダムで商売をする権利や、不動産を所有する権利も是認された。定住して数年もすると、基本的な市民としての権利も得ることができた。このとき商人として最も成功したアセル・レヴィ（Asser Levy）の子孫は、18世紀のニューヨークにまで辿ることができる。

1664年の英蘭戦争でオランダがイギリスに敗北すると、オランダ領「ニューアムステルダム」はイギリスのものとなり、イギリス国王の弟ヨーク公の名前から、「ニューヨーク」に名称が改められた。この時点では、まだオランダ系住民の方が圧倒的に多かった。しかし、イギリス領になったことで、ユダヤ人にとっては、市民の権利や宗教の権利が広がった。シナゴーグの建設禁止も取り払われ、ユダヤ人コミュニティは個人の家を、シナゴーグとして用い、そのような意味では、1695年にシナゴーグは存在したと記録されている。1706年頃に組織されたユダヤ教徒たちの、「シェアリス・イスラエル」（Shearith Israel）は1729年から30年にかけて、最初のシナゴーグを建てた（Mill Lane, South William Street）。初めて新大陸に移住してきてから、およそ75年経っていた。

植民地時代のユダヤ人商人たちは、海外との貿易を得意とした。それは、言語能力に長けており、英語の他に、ヘブライ語、イーディッシュ語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語を操ることができたこと、すなわち、一人で3、4ヶ国語を話したり、書いたりしてもおかしくなかったこと、また、国際的なマーケットの知識に富んでいたこと、さらには親戚がカリブ海域、イタリア、スペイン、近東、インドにいたこと、などがあげられる。ココアやチョコレートをイギリスに初めて紹介し、サンゴ、繊維の貿易もしたが、ショウガ・香辛料交易は独占状態だった。マッコウクジラの脳内の油（鯨蝋）から作ったろうそくを植民地に紹介したりもした。しかし、商売が成功して、定住が長くなると、他の職業にも生活手段を見出していくようになる。

ユダヤ系の人口については、1700年に17家族で計約100人、1728年には31家族（約190人）、1734年に19家族（約120人）との記録が残っている。アメリカ独立戦争時には、イギリス政府側について新大陸から去って行ったユダヤ人と、アメリカ新政府側についたユダヤ人、というふうに、ユダヤ人コミュニティを2分することになってしまった。しかしながら、独立戦争後は、大きな変化が待っていた。「市民の自由」がニューヨーク州の法律にも謳われた。機会が拡大し、弁護士、ニューヨーク証券取引所創設者、大臣、大学理事、医者になる者も出現し、ユダヤ系は社会階層的に大きく羽ばたいていくことになる。

ただ、アメリカ独立戦争でユダヤ系の占める人口比は1パーセントを切ってから、1830 - 40年代までそのまま変わりはなかった。ところが、1847年にドイツ系やポーランド系が大挙して移住してきて1万5千人にまで増え、南北戦争前夜には4万人にまで膨れ上がって、人口比は4パーセントにまで上がった。南北戦争後には、ユダヤ系のモルデカイ・マヌエル（Mordecai Manuel）のように政界に入っていく人物も現れた。

さらには、1870年代から50年間に渡って続く、東欧系ユダヤ人の大移住により、人口統計、社会構造、文化生活など大規模な変化が訪れる。1870年までに、旧移民たちは中流階級層となり、経済基盤も出来上がり、宗教的には改革派ユダヤ教徒となっていた。すなわち、ドイツ系ユダヤ移民は最初は貧しく、行商人として出発する者が多かったが、やがて大商人、百貨店主、投資銀行家、工場主、仲買人になるなど、短期間で急速な社会的上昇を成し遂げていったのである。この繁栄し、アメリカナイズしたアップタウンに住む「アップタウン・ジュー」に対して、ロシアでの迫害から逃げてきた東欧系新移民の貧しい「ダウンタウン・ジュー」の二つに大別することができる。

こうして、1870年に6万人と推定されたニューヨークにおけるユダヤ系アメリカ人の人口は、1924年には約200万人と推定された。ユダヤ系がニューヨーク市の総人口に占める割合も1870年の4%から1920年の29%へと急上昇した。四分の一以上がユダヤ人になったのである。

彼らが最初集住していたロウアー・イーストサイドを、新聞記者ジェイコブ・A・リース（Jacob A. Riis）は、*How the Other Half Lives*（『他の半分はいかに住むか』、1890年）[10]の中で以下のように描出している。

> バワリー（Bowery）通りを横切って、チャイナタウンとリトル・イタリーをあとにヘブライ人（ユダヤ

ニューヨーク市の人口増加とユダヤ系人口の占める割合：1870年～1920年[9]

年	ニューヨーク市の人口	およそのユダヤ系人口	ユダヤ人の割合
1870	1,362,213	60,000	4 %
1880	1,912,698	80,000	4 %
1890	2,507,414	225,000	9 %
1900	3,437,202	580,000	11%
1910	4,766,883	1,100,000	23%
1920	5,620,048	1,643,000	29%

人）地区に入ると、テナメント（アメリカ大都市のスラム街にある共同賃貸住宅）は高さを増して、その間隔も狭くなる。古着屋の長々と続く軒先と、客引きが大勢たむろするバクスター・ストリート（Baxter Street）と、シナゴーグがいくつもあって民衆でいっぱいのベイヤード・ストリート（Bayard Street）は、私達がいよいよそこに近づいたことを感じさせてくれる。私達が今どこにいるかを問う必要はない。街路での意味の分からない言葉と歩道の看板、人々のマナーや服装、彼らの間違えようのない人相は、歩を進めていくごとに彼らの人種を明らかにしてくれる。ロシア系ユダヤ人の奇妙な縁なし帽、立派な髭、異国風で長袖のカフタン服の男たちが、美醜さまざまな女たちを肘で押し分けていく。……これらの選民たちは非ユダヤ教徒を完全に押し出してしまったので、毎年ユダヤ教の大祭日がくると、この地区の公立学校は事実上休みになる。ホッケーなどをしている者はいない。みな忠実に家に留まって祝っているのだ。見間違えることはない。私達は今ユダヤ人地区（ジュー・タウン）に来ているのである。

東欧系（ロシア系含む）ユダヤ人移民が、ロウアー・イーストサイド（Lower East Side）に集中したため、一時は過密状態に達した。具体的には、デビジョン通り（Division St.）、クリスティ通り（Chrystie St.）、リビングトン通り（Livington St.）、クリントン通り（Clinton St.）に囲まれる46ブロックで、面積106エーカーのこの区画に、1893年には1196のテナメントがあった。その人口は74,400人で、1エーカー（約4047m²）当たり702人の密度であった。ドイツ系旧移民はもっと裕福な人たちの住む50丁目から90丁目へ引越していった。少数の富裕層は、当時上流階級の住むハーレムまで北上した。セントラル・パークの北側であったが、西側のブラウンストーンの家に落ち着く者もいた。

さらに、野村達朗氏[11]の言葉を借りれば、ロウアー・イーストサイドの人口は1910年に54万人にまで達したが、以後は減少しだし、ユダヤ人はニューヨーク市内の各地域に衛星ゲットーを形成していった。まず、イースト・リバーを超えてすぐのウィリアムズバーグ（Williamsburg）に進出し、さらに同じブルックリン（Brooklyn）のブラウンズビル（Brownsville）がユダヤ人地区になった。次にブロンクス（Bronx）への進出が始まり、またアッパー・イーストサイド、特にレキシントン・アベニュー（Lexington Ave.）の東、72丁目から100丁目がユダヤ人居住区となった。現在この辺りには、ベス・イスラエル・ノース病院（Beth Israel North Hospital）やマウント・サイナイ医療センター（Mt. Sinai Medical Center）が残っている。そして、ハーレムにもユダヤ人地区が成立したのである。

ロウアー・イーストサイドから急激にユダヤ系人口が減少していった理由は、1910年まで主たる雇用主であった衣料産業が14丁目から23丁目のウエストサイドに移ったことが原因で、これまで歩いて職場に通えた利点がなくなったこと、また過密すぎて不衛生・不健康的だったこと、さらには新移民たちが徐々にアメリカ社会に適応していき、職業も多様化したり、経済状況も少しずつ好転していったことなどがあげられるだろう。

ハーレムも、ユダヤ人地区としては1920年頃をピークに、その後は人々がブロンクスやワシントン・ハイツに引っ越したことで、急激にしぼんでいった。

3．シナゴーグから黒人教会堂へ

「ジューイッシュ・ハーレム」（Jewish Harlem）は70年前に消えてしまったが、存在していた当時は、世界のディアスポラ・ユダヤ人地区として第三番目に大きい居住地であった。第一がニューヨークのロウアー・イーストサイドであり、第二がポーランドの首都ワルシャワであった。デイヴィッド・ダンラップによれば、ジューイッシュ・ハーレムは産業や芸術および経済的に大変活気に満ちた中心地であったそうだが、今やほとんど忘れ去られてしまった。ハーレムの南から北に向かって順に、現在キリスト教の教会堂として残存している主な元シナゴーグは、以下の8つである。

（1）CONGREGATION ANSCHE CHESED；CONGREGATION TIKVATH ISRAEL

「クライスト・アポストリック・チャーチ・オブ・USA」（Christ Apostolic Church of U.S.A.）のもともとは、「コングリゲーション・アンスケ・チェセド」（Congregation Ansche Chesed）であったが、1883年に7番街通りと114丁目の角に新しいシナゴーグを建てると移っていった。（それが、次に扱う会堂である。）その後に入ってきたのが、「コングリゲーション・ティクヴァス・イスラエル」（Congregation Tikvath Israel）で、この小さめの会堂はハーレムも中央ハーレムではない、イースト・ハーレムに住んでいた労働者階級のユダヤ人たちのシナゴーグになった。

（Christ Apostolic Church）

1970年代も半ばになると、112丁目（住所：160 East）のこのシナゴーグに集う信者はわずかしかいなかった。*When Harlem was Jewish* の著者であるグロック博士（Dr. Gurock）がそのシナゴーグに入っていった時、9人の男性が集まっていたが、ユダヤ教において礼拝を始める定足数の10人に一人足りなくて困っていた。博士を入れてやっと10人になった。ラビの話では、いつもこのようにして、どこからか人がやってきて、礼拝が開始できるという奇跡が続いているとのことだった。

(2) CONGREGATION ANSCHE CHESED

「マウント・ネボ・バプテスト・チャーチ」(Mount Neboh Baptist Church) は、もともとは、「コングリゲーション・アンスケ・チェセド」(Congregation Ansche Chesed) であった。

エドワード・I・シーレ（Edward I. Shire）によりデザイン設計されたこの建造物には、ネオ・クラシックのポーチがあり、そこには6本の円柱が立っていて、ペディメント（古代ギリシア建築の三角形の切妻壁）には十戒が備わっていた。礎石には竣工時の西暦1908年と、ユダヤ暦の「5668年」が刻まれている（写真参照）。これこそ、現在も残っている、ジューイッシュ・ハーレムを示す重要な痕跡の1つになっている。

現在の「マウント・ネボ・バプテスト・チャーチ」の方は1937年に創立され、黒人音楽で世界中から来るビジターたちを魅了して、教会として拡大を続けている。

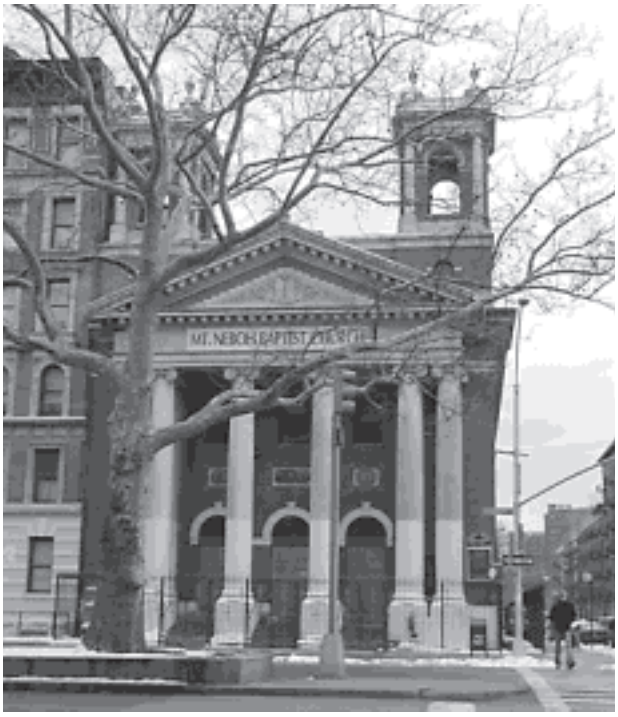
「コングリゲーション・アンスケ・チェセド」の方は、100丁目(251West)に移り、今日に至っているが、ハーレムにあったシナゴーグのほとんどは、アッパー・ウエスト・サイドに移ったのであった。

- 「インスティチューショナル・シナゴーグ」(120 West 76 Street)
- 「オハブ・ゼデック」（118 West 95th Street）
- 「シャアレ・ゼデック」（212 West 93rd Street）
- 「テンプル・イスラエル」(210 West 91st Street)
- 「ザ・マウント・ネボ・シナゴーグ」--1978年に閉鎖。

ジューイッシュ・ハーレムの時代には、ユダヤの祭日に、5番街通りと116丁目のぶつかる辺りでは、シナゴーグに行くユダヤ教徒で一杯であったという。

(3) CONGREGATION OHAB ZEDEK

116丁目にある現「バプテスト・テンプル・チャーチ」(Baptist Temple Church；住所：18 West) は、1906年に「コングリゲーション・オハブ・ゼデク」（Congregation Ohab Zedek）によって建てられた巨大なシナゴーグであった。建造物の上には、「ダビデの星」の装飾が現在も残っている（写真参照）。



（ユダヤ暦の5668年が刻まれている）

（「ダビデの星」のマーク）

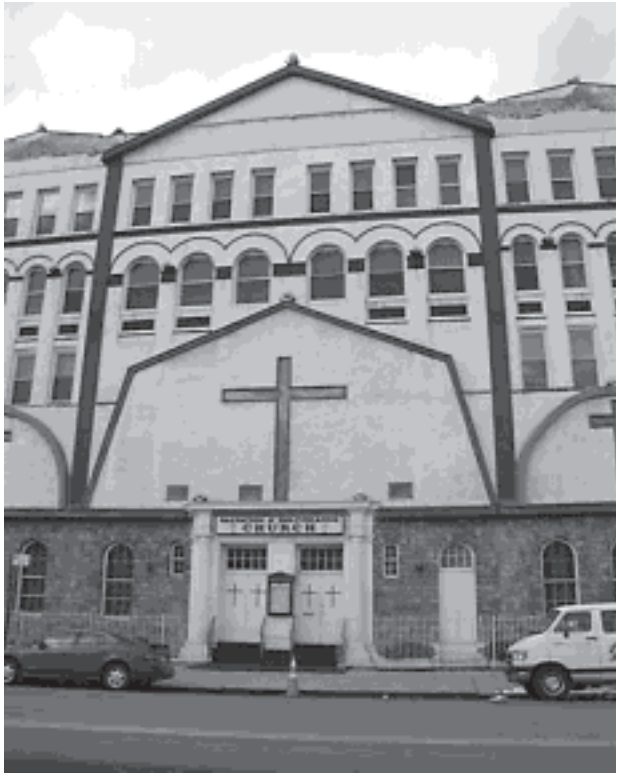
当時、ロウアー・イースト・エンドからやってきたハンガリー系のグループが、英語の話せるラビ（ユダヤ教指導者）を雇い、先詠者（cantor）としてヨセル・ローゼンブラット（Yossele Rosenblatt）を迎えたのであった。

しかし、1965年に火事で聖域が損傷を受け、応急処置しかしていないため、広く寄付金を募って修復したいと考えているそうである。チューダー様式のアーチ型窓枠は未だ健在であるが、シンダーブロック（軽量ブロック）がガラスに取って代わってしまっている。

現「バプテスト・テンプル・チャーチ」は1899年に創立されたが、1938年に「コングリゲーション・オハブ・ゼデク」のシナゴーグを入手した。会衆の数も少なかったので、ユダヤ教と何らかの関係のあるキリスト教の牧師が招かれた。マン牧師（Mr. Mann）はブロンクス出身で、子どもの頃（祖父がユダヤ人であったためか）、土曜日にはユダヤ教のシナゴーグの礼拝に出席し、日曜日にはキリスト教の教会の礼拝に出席していた。マン牧師の夢は、昔の「オハブ・ゼデク・シナゴーグ」時代のように、窓にステンドグラスをはめ、天井には金の「ダビデの星」の装飾を施したような荘厳な会堂に修復することだという。

(4) THE INSTITUTIONAL SYNAGOGUE

116丁目を渡って真向かいにあるのが「サルベーション・アンド・デリヴェレンス・チャーチ」（Salvation and Deliverance Church）だが、ここも以前は、「インスティチューショナル・シナゴーグ」（the Institutional Synagogue）であった。ラビのハーバート・ゴールドスタイン（Herbert S. Goldstein）が指導するシナゴーグで、若者を正統派ユダヤ教の教えに導くために、社会的、教育的、レクリエーション的なプログラムも提供して、近くの劇場では、ユース・ラリーを開催したこともあったという。



（もとは「インスティチューショナル・シナゴーグ」）

(5) CONGREGATION SHAARE ZEDEK

118丁目（住所：25 West）にある現「ベテル・ウェイ・オブ・ザ・クロス・チャーチ・オブ・クライスト」（Bethel Way of the Cross Church of Christ）は、1900年にユダヤ教の「コングレゲーション・シャアレ・ゼデク」（Congregation Shaare Zedek）によって建てられたシナゴーグである。ここには、中央ヨーロッパと東ヨーロッパ出身のユダヤ人が集まってきていた。*When Harlem was Jewish*の著者のグロック博士（Dr. Gurock）によると、第1次世界大戦中に、ハーレムに居住していたユダヤ人総数は、17万5千人であったというが、それから20年もしないうちにこのユダヤ人人口のほぼ全員が他の場所へ転居してしまったのである。

（もとは「コングレゲーション・シャアレ・ゼデク」）

(6) TEMPLE ISRAEL

現在1千人以上の教会員を抱える「マウント・オリベット・バプテスト・チャーチ」（Mount Olivet Baptist Church）の建物自体は、ユダヤ教のシナゴーグ「テンプル・イスラエル」（Temple Israel）として1907年に建設されたものだが、1925年に同バプテスト教会のものになった。「マウント・オリベット・バプテスト・チャーチ」は1876年に創設された教会で、ニューヨークでは古い黒人教会として大きな影響力をもつ教会の一つであるが、ここを入手する前は、ミッド・マンハッタンに在った。2000年にはジンバブエのロバート・ムガベ大統領が来て、ここでスピーチをした。

この元シナゴーグは、アーノルド・W・ブルンナーによって設計された建物だが、この建築家はセントラルパーク・ウエストと70丁目の角辺りにあり、スペイン・ポルトガル系のシナゴーグとして有名な「コングレゲーション・シェアリス・イスラエル」（Congregation Shearith Israel）を建てた建築家である。大理石のペディメントと

聖櫃の円柱はそのまま残っているが、シナゴーグの時代にはそこにトーラー（律法）が納めてあったが、現在では洗礼用の浴槽置き場と化した。この建物の正面には、聖書のハバクク書2章20節の聖句「エホバ神はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」（Jehovah is in his holy temple; be silent, before him, all the earth.）が彫られている。

ユダヤ教としての要素が会堂の中には残存しているが、旧約聖書を同じく信じる信仰者として、（ユダヤ教はキリスト教の土台であるという見地からも）、それをそのまま残して今日に至っている。

（もとは「テンプル・イスラエル」）

（7）TEMPLE B'NAI ISRAEL

現在「ゴスペル・ミッショナリー・バプテスト・チャーチ」（Gospel Missionary Baptist Church）になっている会堂は、もともとは「テンプル・ブネイ・イスラエル」（Temple B'nai Israel）のシナゴーグであったが、教会が次の所有者として決まるまでの数年間そのまま放置されていた、という経緯がある建物である。その間、不審者が侵入し、ライオンの頭を描いた装飾品は持ち去られ、丸天井から銅が剥がされてしまった。

（8）MOUNT NEBO SYNAGOGUE

「シティ・タバナクル・セブンスディ・アドベンティスト・チャーチ」（City Tabernacle Seventh-Day Adventist Church）は、もともとは「マウント・ネボ・シナゴーグ」（Mount Nebo Synagogue）であった。

「ネボ山」（Mount Nebo）とは、聖書に登場する山の名前である。モーセがその頂上から「約束の地」を見渡し、そこから天に召された山である[12)]。

その同じ日に、主はモーセに仰せになった。「エリコの向かいにあるモアブ領のアバリム山地のネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に所有地として与えるカナンの土地を見渡しなさい。」（申命記 32：48 - 49）

モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。主はモーセに言われた。「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。」（申命記 34：1 - 4）

以上、8つの会堂をみてきたが、少なくとも、ハーレムに残存する12くらいの教会がもとはシナゴーグであったと言われている。そのほとんどが20世紀に入ってすぐに建てられ、1920年代にはその会衆のユダヤ系アメリカ人たちが手放して、そのコミュニティは他の地域に転居していったのである。

教会においても礼拝堂が建てられた時と同じ宗派によって運営されているのは、むしろ数少ない。それは、「アビシニアン・バプテスト・チャーチ」（Abyssinian Baptist Church）、「聖パトリック大聖堂」（St. Patrick's Cathedral）、「テンプル・エマニュエル」（Temple Emanu-El）（Trinity Church）くらいで、あとは所有者が変わっていることが多い。

ダンロップの指摘によれば、ユダヤ教徒の礼拝に使用された時よりも、黒人キリスト教会として使用されている方が年月的には長くなってしまったが、「ダビデの星」のステンドグラスや、十戒の板、女性用の2階バルコニー席など、ユダヤ教の特徴が建築や会堂の装飾にその痕跡を残しており、ハーレムの歴史の豊かさを垣間見させてくれる。

ユダヤのヘリテージが残っているのは、シナゴーグだけではない。ハーレムの街並みを散策すると、一時期かなり住んでいたユダヤ系アメリカ人たちの家が残っている。家の玄関ドアの上には、ユダヤ教のシンボルである「ユダヤの星」がしっかりと付いていて、現在の住人が敢えて取り除こうとしない限り、歴史の証人として、また貴重な文化的遺産としてそのまま残っていくことであろう。

終わりに

1920年から「ハーレム・ルネッサンス」が起こり、ハーレムの街はアメリカ黒人文化のメッカ、かつシンボルとなったが、アメリカの歴史が移民の歴史であるように、ハーレムもその例外ではなかった。ハーレムの複雑な歴史は、「移民の街」としてのハーレムの歴史とも言える。

ハーレムはもともと裕福なニューヨーカーや富豪の白人によってつくられた街なので、現在でもあちこちに古いヨーロッパの街並みを思わせるような家々や、凝ったゴシック調の壮麗な建物、また、今回検証したような「ダビデの星」の付いた家やシナゴーグが残っている。現在、ハーレムの建造物は老朽化して再開発が始まっているが、

ハーレムの歴史を偲ばせるこれらの建物は貴重な文化遺産として保存されていくべきであろう。ツーリストのためのハーレム・ツアーに入っている昔の大邸宅や、黒人教会のゴスペル音楽だけではなく、ひっそりとではあるが、その存在を知る人には知らせているユダヤ系アメリカ人の文化的遺産についても忘れてはならないだろう。とりわけ、125丁目の再開発の次は116丁目辺りと言われているので、特にそう願うものである。

〔本研究に当たっては「静岡文化芸術大学平成 16 年度学長特別研究費」を受けました。〕

注

1) マンハッタンの街は碁盤の目のようになっており、東西横に走る道路が「ストリート」、南北縦に走る道路が「アベニュー」と呼ばれている。ここでは、「ストリート」をすべて「丁目」として表記することにする。
2) 『2004 年度版ニューヨーク便利帳』山と渓谷社，2003 年，113 ページ.
3) マンハッタン島の南端にはバッテリー・パークがあり、ここから「自由の女神」像のあるリバティ島行きのフェリーが出ている。このパークの北端の地下鉄駅ボーリング・グリーン（Bowling Green）近くに、「アメリカ・インディアン博物館」（The National Museum of the American Indian）があるのも肯ける。（www.si.edu/nmai 参照）
4) 加藤恭子『最初のアメリカ人：メイフラワー号と新世界』福武書店，1983 年，22 - 28 ページ.
5) 曽根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局，1989 年，41 - 42 ページ.
6) その他の65 名は、イギリス本国から同船した分離主義者と、植民会社（プリマス会社がニューイングランド会社に改組）の送った労働者たちであった。（曽根暁彦，54 - 55 ページ参照.）
7) 須田昌弥 「『ニューヨーク』を見る視点」（金田由紀子・佐川和茂編『ニューヨーク：<周縁>が織りなす都市文化』三省堂，2002年，20 ページ.）
8) ギルバート・オソフスキー『ハーレムの形成』（ハーパー・トーチブック，1966 年，79 ページ.）（荒このみ編『7 つの都市の物語』NTT 出版，2003 年，206 - 207 ページ.）
9) *Encyclopaedia Judaica*. Jerusalem, Israel: Keter Publishing House Jerusalem Ltd., 1996. p.1078.
10) Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*. New York: Penguin Books, 1997（1890）. p.82.
11) 「これによりニューヨーク市のユダヤ人人口に占めるロウアー・イースト・サイドの人口比率は1892年の75%、1903年の50%から、1916年の23%へと低下していったのである。」（野村達朗，65ページ.）
12) 「死海北東端の東 9km、アバリム連山の主峰の一つジェベル・エン・ネバ（標高 802m）と同定。ここからはギレアド、ヨルダン流域、パレスチナの山々を一望に見渡すことができる。」（『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社，1995 年，382 ページ.）

参考文献

Adams, Michael Henry, *Harlem Lost and Found: An Architectural and Social History, 1765-1915*. New York: the Monacelli Press, Inc., 2002.

荒このみ編『7 つの都市の物語』NTT 出版，2003 年.

土井敏邦『アメリカのユダヤ人』岩波書店，2000 年.

Dunlap, David W., "Vestiges of Harlem's Jewish Past," *The New York Times*,（Friday, June 7, 2002）

本間長世『ユダヤ系アメリカ人：偉大な成功物語のジレンマ』PHP 研究所，1999 年.

上岡伸雄『ニューヨークを読む』中央公論新社，2004 年.

金田由紀子・佐川和茂編 『ニューヨーク：<周縁>が織りなす都市文化』三省堂，2002 年.

加藤恭子『最初のアメリカ人：メイフラワー号と新世界』福武書店，1983 年.

野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の生活と労働の世界』山川出版社，1995 年.

大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市 4 ニューヨーク』東京大学出版会，1990 年.

Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*. New York: Penguin Books, 1997（1890）.

シルバーマン、チャールズ・E、武田尚子訳『アメリカのユダヤ人』明石書店，2001 年.

曽根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局，1989 年.

『2004 年度版ニューヨーク便利帳』山と渓谷社，2003 年.

Encyclopaedia Judaica. Jerusalem, Israel: Keter Publishing House Jerusalem Ltd., 1996.

『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社，1995 年.